

個別最適な学びと協働的な学びの 一体的な充実に向けた実践的研究

～育成すべき資質・能力を明確にした
学習デザインの確立を目指して～



【交通アクセス】

都営新宿線 菊川駅下車 徒歩5~6分
都営新宿線・都営大江戸線 森下駅下車 徒歩5~6分
TEL 130-0024
墨田区菊川1丁目18番10号
TEL 03-3634-7476
FAX 03-3634-7450
<http://www.sumida.ed.jp/chuwasho/>

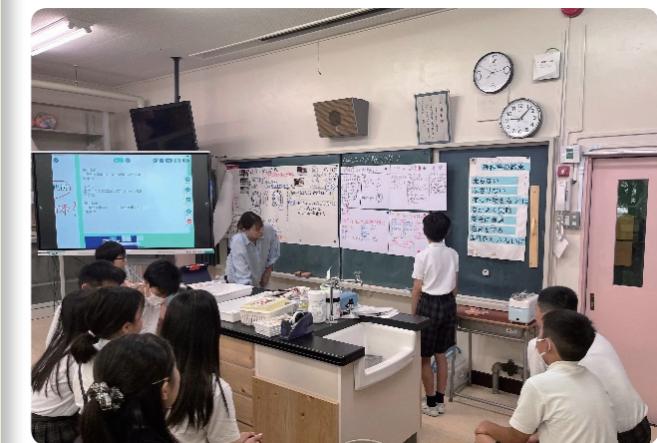


校長 影山 祥仁

本校では、過去三年間にわたりICTを活用した授業力向上と児童の学び考える力の向上を目指して研究を行つてきました。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた実践的研究」を研究テーマに掲げ、ICTの必要性や効果、適材適所のICT活用、個別最適な学びと協働的な学びの検証、そしてその一体化の検証を行つてきました。成果として、ノート・ポートフォリオの効果、ICT活用による学習意欲の向上、個別最適な学びと協働的な学びの具体的な方法、知識定着のためのアプリの効果、学習法及び指導法の具現化、そして個別最適な学びと協働的な学びの一体化の実証が明らかになりました。

本年度は、「児童の育成すべき資質・能力を明確にした学習デザインの確立」に焦点を当て、児童の主体的・対話的で深い学びを促す授業改善を進めてまいりました。授業研究を通して、児童の思考の深まりや学びの質の向上を実感する場面が多く見られたとともに、教職員の授業力向上にもつながったと感じております。

結びにあたり、これまで本校の研究のために御指導を賜りました、千葉大学教育学部理科教育教授 山下修一先生をはじめ多くの先生方、加藤裕之教育長をはじめ墨田区教育委員会に感謝を申し上げます。今後も御指導・御支援を賜りますようよろしくお願いいたします。



CHUWA
墨田区立中和小学校

研究主題

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた実践的研究

～育成すべき資質・能力を明確にした学習デザインの確立を目指して～



目指す児童像 自ら学び考え、自分の考えを表現できる児童

1. 研究主題について

本校では、令和5年度末までに、「すみだGIGAスクール構想」授業改善ロードマップのステップ1から2への段階は概ね達成できたと考える。研究の成果から、「一人1台端末」は、教員が教えるための教具ではなく、児童が学ぶための文房具としてすることで、児童の学習の質が向上していく可能性を見いだすことができた。特にこれまであまり効果を実感することができなかった「個別最適な学び」について、個々の理解度に応じた学習が可能となり、学びに対する達成感や納得感が向上する効果が実感できた。1年次は、一人1台端末を含めたICTを文房具と同じように扱い、「個別最適な学び」と「協働的な学び」のより一体的な充実に迫る研究を進めた。児童自身が自分に合った学習を行い、考えを整理し、グループや学級全体に分かりやすく伝え、活発な交流ができる児童を育成したいと考えた。「個別最適な学び」により、自分のよさや可能性を自覚することのできる児童、「協働的な学び」により、多様な他者を価値のある存在として尊重し、協働しながら困難を乗り越える児童、そして、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることを通して、豊かな人生を切り拓き、持続可能な創り手となる児童（＝自立した学習者）の育成を目指した。すなわち「自ら学び考え、自分の考えを表現できる児童」の育成をした。これまでの研究結果を生かし、ICTを使わなくても成立する学習や、ICTよりも紙を使った方が効果的な学習もあり、ICTはあくまでツールであることを確認して活用することを前提とした。これらの実現のために、教員が育成すべき資質・能力の育成に向けた学習をデザインし、最終的には児童自身で学習をデザインしていくことを目指した。

2年次は、昨年度の成果を基に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」のより一体的な充実に迫る研究を進めてきた。さらに、墨田区学習状況調査の結果より、中学年以上の理科に課題が見られたため、2年次は理科での検証を進めてきた。

どのように単元をデザインするのか？

どのような手順で学習をデザインするのか？

学習を進める子供の思考と教員の役割

育成すべき資質・能力とは？

育成すべき資質・能力別の学習デザインとは？

研究構想図

研究主題

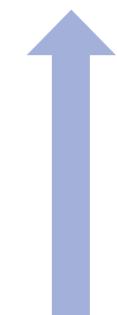
個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた実践的研究
～育成すべき資質・能力を明確にした学習デザインの確立を目指して～



目指す児童像 自ら学び考え、自分の考えを表現できる児童



学力向上



個別最適な学び

- ① 指導と評価の一体化
- ② 学習計画
- ③ 知識・技能の確実な習得
- ④ 思考力・判断力・表現力の育成
- ⑤ 探究的な学び
- ⑥ 学習の振り返り

協働的な学び

- ① 教員の役割
- ② 学び合いによる考え方の広がりと深まり
- ③ 課題解決に向けた学び

一体的な充実



単元と学習デザイン

(R6年度重点)

- 個別最適な学びと協働的な学びを一体化させた単元計画及び学習のデザイン化
- 育成すべき資質・能力の整理

育成すべき資質・能力別学習デザイン

(R7年度重点)

- 育成すべき資質・能力を明確にした学習デザインの確立

2. 研究の概要

(1) 研究の重点

(R6 年度 教科：全科)

① 個別最適な学びと協働的な学びを一体化させた単元計画及び学習のデザイン化（手順）

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた学習の実現に向けて、各分科会で学習をデザインしていく。「個別最適な学び」と「協働的な学び」を児童の実態に応じて適切に位置付けながら、資質・能力の育成を目指していく。

② 教員の役割の検証

児童一人一人の学習進度の丁寧な見取りを基本として、状況に応じた指導方法の工夫や教材の提供のための手だてを講じる。また、児童の思考力が高まるような質問や発問（ファシリテーターとしての教員）の分析を行う。

③ 単元で育成すべき資質・能力の検証と整理

学習指導要領において育成すべき資質・能力は、次の3つに整理されている。本研究では、各分科会で検証・分析していく。

○ 知識・技能

- 知識→他の学習や生活の場面でも活用できる確かな知識
- 技能→他の学習や生活の場面でも活用できる確かな技能

○ 思考力・判断力・表現力

- 思考力→問題を解決したり、考えを形成したり、新たな価値を創造したりしていくために必要な力
- 判断力→結論を決定していくために必要な判断や意思決定をする力
- 表現力→伝える相手や状況に応じて表現する力

○ 学びに向かう力、人間性等

(他の二つの柱をどのような方向性で働かせていくのかを決定付ける重要な要素)

- 自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度
- 自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力
- 多様性を尊重する態度や互いの良さを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやり等の人間性

(R7 年度 教科：理科)

④ 育成すべき資質・能力を明確にした学習デザイン

育成すべき資質・能力によって、それぞれの習得を目指す。「知識・技能」であれば「習得型学習」、「思考力・判断力・表現力」であれば「活用型学習」、涵養を目指す「探究型学習」を明確にし、それぞれの資質・能力に応じた学習デザインをしていく。また、児童自身で気付けるように教員がファシリテーションし、自己調整学習を行う際には、そのデザインを明確にする。

⑤ デザインした学習についての検証（工夫・手だて）

どの学習においても当たり前に活用する方法を検証する。

⑥ 評価の仕方

一人一人のつまずきや伸びについて指導過程で評価する形成的評価を検証する。

- 振り返りの仕方

- 自由進度表

- B層（概ね満足できる）を基準としたA層（十分満足できる）・C層（概ね満足できる状況へ）への手だて

(2) 墨田区より提供されている教材や学習アプリの活用（個別最適な学び）

① 問題データベースプリント・ふりかえりシート・学力調査過去問題

活用方法

- 単元末にふりかえりとして活用
 - 年度末に総復習として活用⇒忘却した知識の再定着
 - 夏休み用課題として活用
- ⇒知識定着
⇒新年度学力調査の結果向上

② よむ YOMU ワークシート

活用方法

- 配信された週にロイロノートで配布して、家庭学習として活用
 - 授業内でポイント指導・解説
- ⇒資料を読み取る力向上（墨田区学習状況調査結果より）

③ ミライシード

ドリルパーク・テストパークの活用方法

- 単元内で家庭学習として活用⇒知識の定着
 - 年度末に総復習として活用⇒忘却した知識の再定着
- ⇒新年度学力調査の結果向上

④ モノグサ

活用方法

- R4.5 月末～R6 年度末（3 年継続）
 - 学校独自で導入（私費）
 - 漢字や計算をはじめとした各教科の基礎的・基本的な知識の定着に向けて、「10 分間スタディ」の時間及び日々の家庭学習を中心に、2～6 学年で活用。
- ⇒一人一人に難易度や問題を合わせてくれるために、間違えたまま練習して覚えてしまうことがなかった。
⇒教員が児童の取組状況や定着度が可視化できた。
⇒出題内容や形式をカスタマイズでき、授業や児童に合わせた課題がつくれた。
⇒区からの学習アプリが充実してきたので、R6 年度末にて終了。

個別最適化を進め、児童一人一人の豊かな学びにつながった。

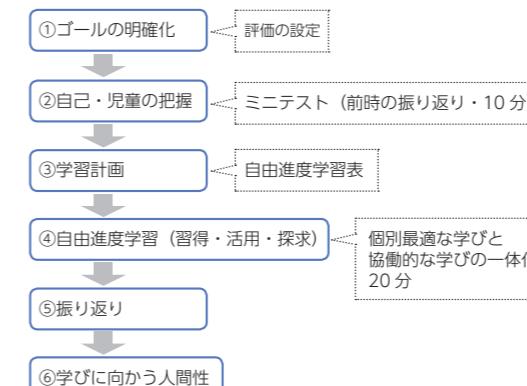
研究経過（2年次）

令和7年度 日付	内 容
4月2日	基礎研究（研究内容・年間計画・研究授業日決定）
4月25日	講演会「中和小学校における校内研究について」 講師：千葉大学教育学部理科教育教授 山下 修一 先生
6月4日	研究OJT 高学年 ①分科会提案確認 ②単元計画の確認 ③視点の確認 ④協議
6月20日	研究授業① 第5学年「メダカのたんじょう」 授業者 千葉 哲也 主幹教諭 第6学年「ものの燃え方」 授業者 稲富 瑞紀 主任教諭 講師：千葉大学教育学部理科教育教授 山下 修一 先生
8月29日	研究OJT 中学年 ①分科会提案確認 ②単元計画の確認 ③視点の確認 ④協議
9月17日	研究授業② 第3学年「音のふしぎ」 授業者 吉嶋 樹哉 教諭 第4学年「夏の終わり」 授業者 松井 美帆 主任教諭 講師：千葉大学教育学部理科教育教授 山下 修一 先生
9月22日	研究OJT 低学年 ①分科会提案確認 ②単元計画の確認 ③視点の確認 ④協議
10月3日	研究授業③ 第1学年「あきをたのしもう」 授業者 石井 公美 教諭 第2学年「作って遊ぼう 動くおもちゃ」 授業者 屋代 夢珠人 教諭 講師：千葉大学教育学部理科教育教授 山下 修一 先生
10月29日	研究全大会 リハーサル・資料作成
12月5日	研究発表会 第6学年「月の形の変化」 授業者 後藤 直也 教諭 第5学年「電磁石の性質」 授業者 白上 素子 教諭 第4学年「冬と生き物」 授業者 長島 圭史 主任教諭 第3学年「じしゃくのふしぎ」 授業者 菅原 かの子 主任教諭 第2学年「作って遊ぼう 動くおもちゃ」 授業者 阿部 美奈子 主任教諭 第1学年「ふゆをたのしもう」 授業者 小松 純子 主任教諭 そよかぜ学級 生活単元学習「そよかぜパーティーをしよう」 授業者 薊 裕也 教諭 T1 山倉 さおり 主任教諭 T2 中里 照久 主任教諭 T3 講師：千葉大学教育学部理科教育教授 山下 修一 先生 講演：「みんなで分かる理科授業 みんな輝き成長する職員室」
1月28日	本年度の成果と課題 次年度の研究の確認

第5学年 理科

「メダカのたんじょう」

④ 育成すべき資質・能力を明確にした学習デザイン



⑤ デザインした学習についての検証（工夫・手立て） ⑥ 評価の仕方

評価の設定

この単元の目標を児童に分かりやすく伝えるために、以下のように説明する

- ①メダカの成長を観察しよう！ ②目的をもって実験しよう！
- ③自分のペースで学ぼう！ ④みんなで発表しよう！

ミニテストの実施

- ①事前知識の確認 ②学習意欲の向上 ③理解度の評価 ④学習の準備 ⑤授業の導入

単位時間の自由進度表

- ①個別学習のサポート ②学習の可視化 ③目標達成の意識向上 ④フィードバックの提供

単元計画のくふう

単元計画を児童の実態に応じて、計画・習得・活用・探究の段階を適切に位置付けることで資質・能力の育成を目指す。

ふりかえりシート

- 本時の学習で「どのように学んだのか（学び方）」、「誰に何を聞いたのか」、「伝えたのか（協働）」、「どの程度理解が進んだのか」を書かせることで、学びの調整力を見取る。
- 本時に学んだことは何なのか振り返ることで、学習を定着させることや、自分が学べていないことを振り返る時間を作る。
- 学習計画表を提出・共有させることで、自分の学び方と友達の学び方、学習進度を比較し、よりよい学習方法を考えさせる。

評価基準の設定

評価基準	観察記録
C「概ね満足できる」状況にするための手立て	<p>観察記録 観察記録の詳細さと正確さを向上させるために、具体的な記述方法を指導する。観察のポイントを明確にする。</p> <p>実験の計画と実施 実験の計画をより論理的にするために、計画書の作成方法を指導する。実施の手順を確認し、実験結果の分析方法を具体的に指導する。</p> <p>発表 内容をより明確にするために、発表の構成方法を指導する。表現力を向上させるために、発表の練習を行う。</p> <p>自己管理能力 自由進度学習において、自己管理能力を向上させるために、学習計画の立て方を指導する。進捗確認の方法を具体的に指導する。</p>

第6学年 理科

「ものの燃え方」

⑤ デザインした学習についての検証（工夫・手だて） ⑥ 評価の仕方

評価の設定

この単元の目標を児童に分かりやすく伝えるために、以下のように説明する。

① 実験計画を基に、自分たちの疑問を解決しよう！

「これまでの学習で獲得した知識を生かして、物が燃えた後の空気について調べるために計画を立てましたね。実験を行い、結果をまとめましょう。」

②みんなで発表しよう！

「観察や実験の結果をまとめて、クラスのみんなに発表します。発表を通じて、ものの燃え方についての理解を深めます。」



ミニテストの実施

自由進度表

単元計画の工夫

単元計画を児童の実態に応じて、計画・習得・活用・探究の段階を適切に位置付けることで資質・能力の育成を目指す。

評価基準の設定

評価基準
A「十分満足できる」状況
B「概ね満足できる」状況
C「概ね満足できる」状況 にするための手だて

ふりかえりシート

- 本時の学習でどのように学んだのか（学び方）誰に何を聞いたのか、伝えたのか（協働）、どの程度理解が進んだのかを書かせることで、学びの調整力を見取る。
- 本時に学んだことは何なのか振り返ることで、学習を定着させることや、自分が学べていないことを振り返る時間を作る。
- 学習計画表を提出させて共有をすることで、自分の学び方と友達の学び方、学習進度を比べ、よりよい学習方法を考えさせる。



第4学年 理科

「夏の終わり」

アンケートの実施

①児童の実態の確認

単元開始前にアンケートを行い、理科・生物への関心や既習事項の定着、学校外での生物との触れ合いの実態を把握し、単元を構成する。

②自己の把握

アンケート結果を児童にフィードバックすることで、自己の生物に関する理解や実態を把握し、学習に対する意欲をもたせる。

データ整理・活用の計画

この「季節と生物」では、年間を通して動物の活動や植物の成長について、季節ごとに違いがあることを学習する。そのことを児童に4月に伝え、4月から定期的に観察・記録をしてきた。継続して観察している生物の実態や児童の気付きに応じて、単元計画を立てた。すでにロイロノートで自発的に写真をつなげて整理している児童もいる。春から夏にかけての記録（データ）をどのように整理し、学習にどう生かすかを児童に投げ掛け、ワークシートの形式を児童とともに作っていく。

個別最適な学びと協働的な学びの一体化

○個別最適な学び→①指導の個別化と②学習の個性化

①指導の個別化

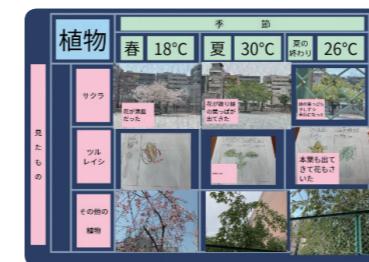
4月に行った墨田区学習状況調査等の結果では本校の理科の正答率は57.5%で区の平均よりも低い。夏休みの宿題でも復習の課題を出し、既習事項の定着を図った。また支援が必要な子供により重点的な指導を行えるよう課題を設定した。

②学習の個性化

生き物が好きな様子の児童が多いように感じている。以前、夏の生き物の様子について学習したときには教科書に載っていない生き物の夏の様子についてインターネットを活用して調べる様子も見られた。今回、生き物の様子をまとめる際にその他の植物・動物の枠組みを設定し、子供の興味・関心を生かせるようにし、さらにそれを共有し、互いに教え合うことを通して協働的な学びとなるようにしたい。

振り返り

学習内容に関することと、学び方に関することの両方を振り返るようにさせる。授業前に前時に振り返りを見返すようにさせたり、学級の児童の振り返りを伝えたりする。



第3学年 理科

「音のふしき」

前時までの振り返りの実施

①ミニテスト・一問一答による理解の確認

児童の既習事項の定着や理解度を把握するために、ミニテストや一問一答形式を活用する。短時間で実施できるため、授業の導入として効果的であり、児童の学習意欲を高めるとともに、つまずきへの早期対応が可能となる。

②絵・図・写真の提示による記憶の活性化

前時の活動や実験の様子を視覚的に提示することで、児童の記憶を呼び起こし、体験を言語化しやすくする。視覚的手がかりにより、児童の思考を自然に引き出し、次の学習への関心を高める。

③実物提示による体験の再構築

前時に使用した楽器や道具を再提示し、児童が実際に触れたり見たりすることで、感覚的な記憶を再構築する。实物を通して、児童の興味を喚起し、学習内容への理解を深める。

④ノート・ワークシートによる気付きの整理

ノート・ワークシートを活用し、児童が前時の気付きや疑問を自分の言葉で記述する。これにより、思考が整理され、次時の問題発見や探究活動への意欲が高まる。

学び方の選択と振り返りの工夫

①学び方の選択による主体的な課題解決

児童が課題に対して自分で方法を考え、実験に必要な道具を自由に選択できるようにする。教員はあらかじめ複数の道具を提示し、児童が「何を使って」、「どう調べるか」を自分で判断することで、個別最適な学びを促す。グループや個人で話し合いながら計画を立てることで、協働的な学びも育まれる。

②方法の振り返りによる思考の深化

実験後、児童が自分の選んだ方法について「上手くいった点」、「工夫した点」、「改善したい点」などを振り返る時間を設ける。ワークシートやふせんを活用し、自分の学び方を言語化することで、次の課題解決に向けた意欲と見通す力を育てる。

③結果の振り返りによる理解の定着

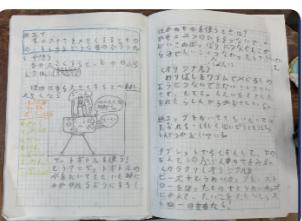
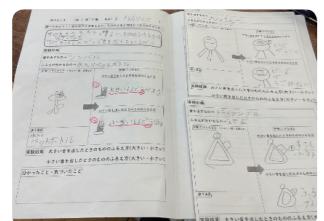
予想と結果を比較し、「なぜそうになったのか」、「どんなことが分かったのか」を整理する。図や表を使ってまとめたり、友達と共有することで、音の性質に関する理解を深める。

④協働の振り返りによる関わりの意識化

活動の中で得られた気付きや、友達の考えに触れて感じたことを振り返る。「話し合ってよかったこと」、「友達の考えで気付いたこと」などを共有することで、協働的な学びの価値を実感させる。

⑤自己評価と次への意欲付け

活動の最後に「今日の学習で分かったこと」、「もっと調べてみたいこと」などを記述させることで、児童が自分の学びを振り返り、次の探究への意欲を高める。ふせんや短い記述を使って、気軽に取り組めるよう工夫する。



第2学年 生活科

「作ってあそぼう うごくおもちゃ」



④育成すべき資質・能力を明確にした学習デザイン

単元では、児童が身近な材料を生かして、「こんなおもちゃを作りたい!」、「こんなおもちゃが作れるかも!」という思いや願いをもち、主体的な学びを深められるように、活動時間の確保や環境整備を工夫し、個別最適な学びを支える学習デザインを行った。おもちゃを作る際の支援として、教科書や図書室の本、一人1台端末を活用できるようにして、個別最適な学びへとつなげる。また、教員自身もおもちゃを作り、紹介して、児童がイメージをもちやすくし、調べたもの以外にも工夫ができる事を示唆していく。おもちゃを作った後は、友達と交流の場を設け、他の作品に触ることで、「こんな工夫ができるかも!」、「どうして早く動くのだろう」などの協働的な学びの充実へとつなげていく。

主体的な児童育成のための工夫

●学級活動の中で、全員での共通体験として簡単なおもちゃを作った。その経験を経てから、グループごとにおもちゃを作成し、紹介し合う活動を行う。別のおもちゃを紹介したり、交流したりすることで、あのおもちゃを作つてみたい、こんな工夫して作りたいという意欲を引き出していく。最終的には自分の作りたいおもちゃを選択し、決定へと導いていく。このような段階を踏み、十分な準備時間や機会も確保して、児童の主体性を高めていく。

個別最適な学びと協働的な学びの一体化

●全員での共通体験からの気付きを全員で共有する時間を設定する。グループでの体験から教え合いと友達の知識や情報を共有することで、自分のおもちゃ作りへと生かしていくようにする。

●個々の活動に入った後も、共有したいものについては途中で作業を止めて紹介したり、みんなが見られる掲示板に書き込んで見られるようにしたりして、クラス全体で知識、情報を共有できるようにする。

ICTの活用

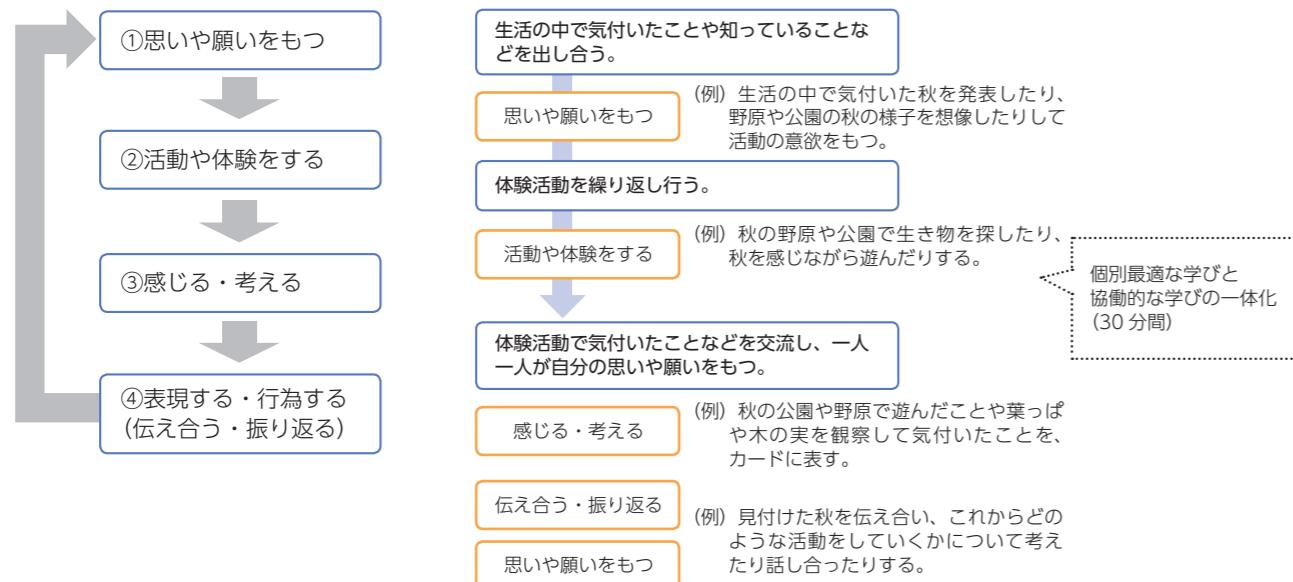
一人1台端末等の活用を進めているが、タイピングに時間がかかるなど個人差がある。見やすい字を書くスキルも練習中である。そこで今回は、ホワイトボードを活用する。枠線を設け、間違えた際にすぐに直せたり、比較的大きいボードによって綺麗な字を書きやすくしたりする。作成したホワイトボードを一人1台端末のカメラ機能で撮影し、送った写真をスクリーンに映すことで、ホワイトボードが拡大され、ボードの文字が見やすい発表ができる。



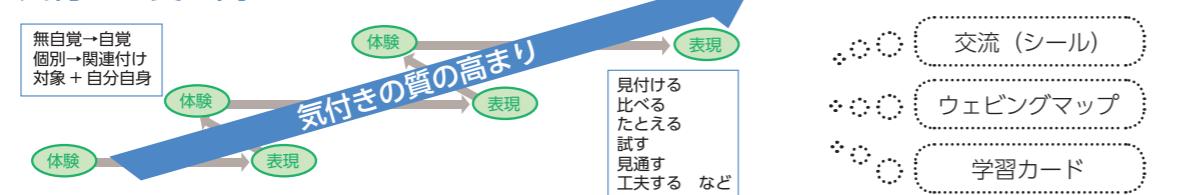
第1学年 生活科

「あきを たのしもう」

④ 育成すべき資質・能力を明確にした学習デザイン



気付きの質の高まり



学習過程は、いつも①～④が順序よく繰り返されるものではなく、順序が入れ替わることもあるし、一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われる場合もある。また、必ずしも1時間あるいは単元に当てはまるものでもない。 ※学習指導要領解説 生活編 P90より引用

① 「ウェビングマップ」

- イメージを広げたり、自分の考えや言葉を可視化したりして多面的に「秋」という季節をとらえるようにする。

② 「やってみたいことメモ」

- 児童が自分の考えを記録できるようにする。

③ 「じっくりタイム」の設定

- 自分の考えをまとめる時間を設定することで、学びが自分事になり、主体的に取り組むことができ、表現活動への準備になる。

- 児童が頭の中で思い浮かべた「秋」のイメージを、絵にすることで思考を可視化することができる。

④ 「わくわくタイム」の設定

- 友達との対話や共有を通して、他者の視点に触れ、発見し合い、学びが広がるようにする。
- シールを活用することで交流の視点を明確にすることができます。

⑤ 「ふりかえりカード」の作成

- 振り返る視点（がんばったこと、気付いたこと、分かったこと、友達との交流で気付けたこと、やってみたいと思ったこと等）を明確にすることで、児童が自分の発見や思いを記録し、自分の考えを頭の中で整理することができる。

研究のまとめ

(1) 研究の成果

① 児童の成果と成長

◎理解度の向上

単元ごとの授業後に実施したふりかえりシートやワークシートの記述から、児童が自分の言葉で学びを説明できるようになっていることが確認できた。「個別最適な学び」と「協働的な学び」を組み合わせることで、児童の理解が深まっている様子が見られた。

◎自己管理能力の向上

自由進度表を活用した学習では、児童が自ら学習の計画を立て、進捗を管理する姿が見られた。時間の使い方や優先順位の判断ができるようになってきた。

◎評価基準に基づく成果の可視化

単元ごとに設定した「めあて」やループリックに基づいて、児童の成果を教員が記録。児童自身も振り返り活動を通して、自分の到達度を確認することができ、学習の成果が可視化された。

◎学習意欲の向上

授業後の振り返り活動や自己評価の記述から、児童が「もっと知りたい」、「次はこうしたい」といった前向きな言葉を多く記すようになった。授業への主体的な参加が増えていることが確認できた。

◎協働スキルの向上

個別活動と協働的な学びを交互に取り入れた授業において、話し合い活動の記録や教員の観察から、児童が他者の意見を取り入れながら自分の考えを深める姿が見られた。問題解決に向けて協力する態度が育まれている。

② 学習デザインの工夫

○授業の流れをルーティン化することで、児童が学習に取り組みやすかった。

○自由進度学習により意欲的な学びが促進された。

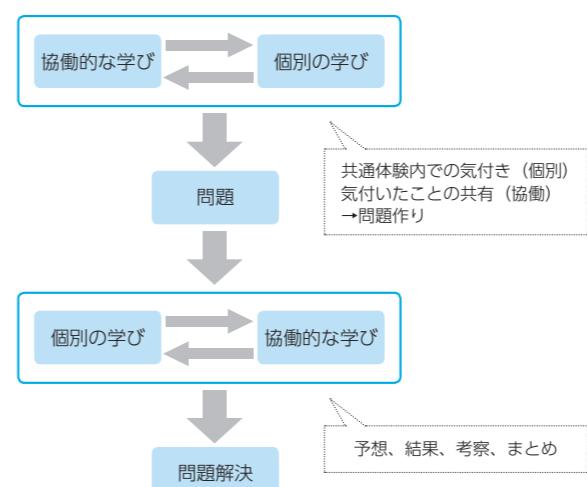
○ワークシートの工夫により、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化が図られた。

▲行程が多く、振り返りの時間が不足しがちであった。

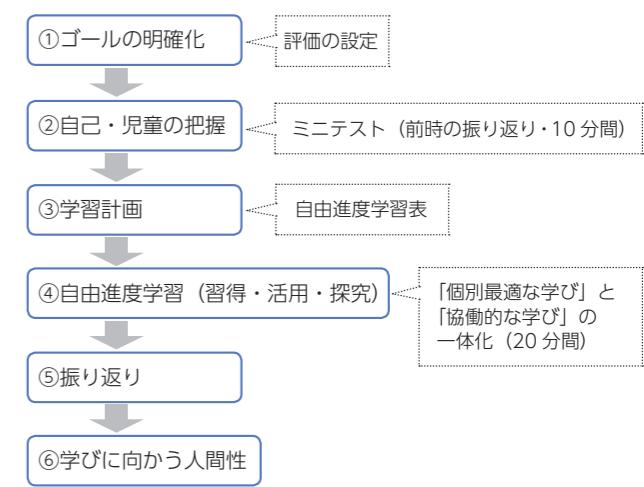
→コア知識が定着していれば短時間でも振り返りは可能である。

→ミニテストで確認する。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体化させた学習デザイン（1年次）



育成すべき資質・能力を明確にした学習デザイン（2年次）



③ 教員の役割

- ◎ ファシリテーターとして、児童の自主性を高めた。
- ◎ ワークシート等のサポートにより、学びの理解と応用が促進された。
- ◎ 評価者としてのフィードバックにより、児童は進歩を把握し、継続的な成長が可能となった。
- ◎ コーディネーターとして、協働的な学びを促進した。

④ 評価の工夫と成果

- ◎ 形成的評価により、理解度を継続的に把握し、指導の調整が可能となった。
- ◎ 習熟度に応じた対応で、児童に最適な指導が提供された。
- ◎ ゴールの設定により、児童は明確な目標をもって学習に取り組むことができた。
- ◎ 形成的評価を通じて、児童は自己評価の機会を得たことで、自分の学習を振り返り、計画的に進める力が育まれた。

⑤ 全体的な成果

- ◎ 概ね実証された。
ワークシートを自由進度型で準備することで、児童は個別学習・自主的な学習をせざるを得ない状況となり、個別最適な学習の機会が生まれた。
学校での観察活動では協働的な学びが促進され、フィードバックの機会が豊富に得られた。
一斉授業に比べて、コア知識の定着が明確に見られた（学習デザイン・ミニテスト・体験活動による）。

（2）今後の課題

- ▲ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を実現するためのリソース（教材、ICT、時間など）の一層の充実
- ▲ 教員が多岐にわたる役割（ファシリテーター、ガイド、評価者、コーディネーター）を担うことによる負担増加への支援体制の強化
- ▲ 自由進度表の活用により、進度に差が生じた。進度の遅い児童へのサポート体制の強化
- ▲ 形成的評価を基本としたため、評価の一貫性を保つことが難しかった。教員間で評価規準を統一し、適切なフィードバックを提供するためのトレーニングの実施

● 御指導いただいた講師の先生方

〈1年次〉

- 千葉大学教育学部国語教育研修室教授 寺井 正憲 先生
墨田区立錦糸小学校 指導教諭 上田 智恵子 先生
墨田区教育委員会事務局指導室 指導主事 秋山 恒子 先生

〈1・2年次〉

- 千葉大学教育学部理科教育教授 山下 修一 先生
墨田区教育委員会事務局指導室 指導主事 図師 和哉 先生

● 研究に携わった教職員

◎研究推進委員長 ○研究推進委員

校 長	影山 祥仁	そよかぜ学級	中里 照久
副校長	磯 香織	そよかぜ学級	山倉 さおり
1年1組	小松 純子	そよかぜ学級	薗 裕也
1年2組	石井 公美	○音 樂	沖山 健之介
2年1組	阿部 美奈子	図画工作	天城 拓哉
○2年2組	屋代 夢珠斗	算数少人数	廣田 裕一
3年1組	菅原 かの子	養護	石井 由里子
3年2組	吉嶋 樹哉	介助員	佐藤 久美
4年1組	長島 圭史	介助員	坂本 州
○4年2組	松井 美帆	介助員	武 美枝子
○5年1組	千葉 哲也	理科講師	小澤 忠雄
5年2組	白上 素子		
6年1組	稻富 瑞紀		
6年2組	後藤 直也		

あとがき

副校長 磯 香織

研究協力校として2年目となる本年度は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」のより一体的な充実に向けて研究を進めて参りました。育成すべき資質・能力の育成に向けた学習デザインを明確にし、児童自らが学び考える力を育むための授業を確立させることを目指してきました。授業実践では、児童の「個別最適な学び」を実現するため場や教材の工夫、授業の中での教員の役割を様々に工夫する姿がありました。各学年での授業を通して、児童が明確な目標をもって学習に取り組む姿、自分の学習を振り返り次の学習に意欲的に取り組む姿を多く見ることができましたのは大きな喜びです。最後になりましたが、墨田区教育委員会事務局指導室指導主事である図師和哉先生、秋山恭子先生、千葉大学教育学部理科教育教授である山下修一先生、千葉大学教育学部国語教育研修室教授である寺井正憲先生、墨田区立錦糸小学校指導教諭である上田智恵子先生には、研究主題に迫るための丁寧でより具体的な御指導をいただきました。実りある充実した研究ができたことに深く感謝申し上げます。